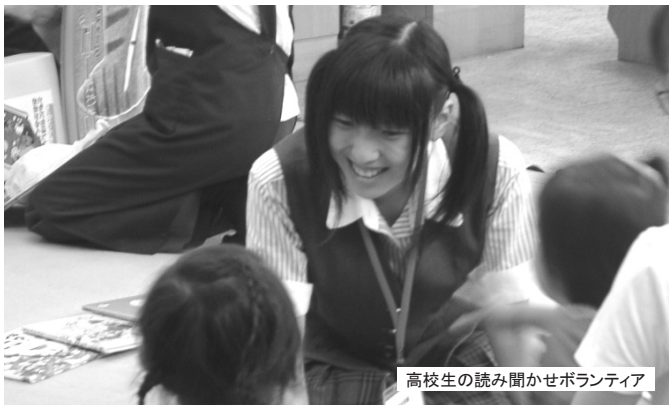
● 読書力を身につけさせる工夫

本誌前号で、松本編集長が、「読書力を身につけさせるための工夫を紹介して欲しい」とコメントされていました。この点でも私たちは、「何も特別のことをしているわけではありません」と答えるしかありません。

朝、登校してきた生徒の気持ちを落ちつかせるために「朝読書の時間」を設けていますが、どこの学校でもやっていることです。感想文を書かせる、調べ学習をさせる等々も同様でしょう。あえていえば、読み聞かせや音読の体験を積ませるようにすることと、書籍の紹介や検索に工夫していることくらいでしょうか。

声を出して本を読むというのは、慣れないと辛いものですが、やってみれば好い加減な読みや理解もしなくなります。まして、幼児相手に読み聞かせる場合には、相当の表現力も要求されます。音読の爽快感や満足感を知ると、読書量は結構伸びていきます。


高校生の読み聞かせボランティア

本校の図書室には絵本の蔵書もかなりの数があり、幼児に読み聞かせるためだけでなく、読書の習慣のない生徒の”入門”にも一役かっています。読む習慣さえ身につけば、自然と年齢相当の本を読むようになるものです。大人が「そんな絵本を読んで…」などというと、元の本嫌いに戻りますから、保護者にもご理解ご協力をいただいています。

上級生が下級生に「こんな本があるよ」と紹介するコーナーが、廊下や下駄箱の横に設けられています。また、本校の図書室では、日本十進分類法（NDC）を用いて分類しているため、インターネットで書籍を検索することにも、生徒は抵抗がありません。図書室にない本は、近くの東京都中央図書館や港区図書館にあることを確認して、すぐに借りにいきます。

英語補習校だより（3）

批判精神を育む

英語モードに戻った子どもたちは、実に賑やかです。教師が話している端から、質問をしたり意見を挟んだりします。それは、英米の現地校や国際学校の教育の基本に、「批判的に読む・考える・表現する」能力を育むという哲学があるからでしょう。とにかく目前の素材や情報を疑ってみることを幼い時から訓練するわけで、自分なりの判断を持ち、相手を説得するのが当然という感覚が備わってきます。

しかし、日本の学校教育では、まず「先生の言うことをよく聞く」ことが求められます。疑問や不明な点があっても「一通り聞いて（or 読んで）、全体を眺めてから質問する」のが普通です。だから、海外で相手の話の途中でも遠慮なく質問をすることに慣れた子どもたちは、戸惑ったりストレスを感じたりするわけです。

「英語補習校」は、当然「批判的に読む・考える・表現する」能力を伸ばそうとしているのですが、そのことが日本の学校での“心労”を解消し、自信を回復させる機能も果たしています。

午後の「理科」の時間（JSL 指導）も、実に賑やかに発言が噴出します。海外にいたために経験していない実験や観察、あるいは日本語の理科用語に不慣れなために、学校の授業では大人しくしていたことが容易に想像できます。こうした“心理障壁”を取り除き、批判精神や探求心を回復させることも、「英語補習校」の大事な機能といえるでしょう。

http://www.toshima.ne.jp/~kyoiku/Eigo-Hoshuko-J.htm

編集長から一言

「生徒一人の年間の読書量が平均で 50 冊以上」の秘訣を紹介していただきました。

結論は、学校として、生徒が日常的に読書に親しむ環境の充実をしっかりやっておられるのが、秘訣のようです。これが難しいのですが。

また、前半の「学習指導センター」は、現地校のカウンセラー制度を徹底させたものにみえます。現地校のシステムに慣れた帰国生にとっては、日本への適応の心強い味方になるでしょう。帰国生の場合、具体的に、どんな内容のカウンセリングが受けられるのか、聞いてみたいですね。